幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.35
平成20年3月26日

六十周年の年を迎えて

会長 新堀豊彦

全くアッという間に十年経ちました。五十周年の行事をすませたのが、ついこの間のような気がいたします。

昭和二十三年（一九四八）七月十一日に、わが横浜能楽連盟は創設されました。当時の詳しいことは、五十周年の時発刊された「お能と横浜」（かなしん出版）に記述されておりますので、この際は余計な回顧はいたしませんが、ともかく考えて見れば、その歴史の重味は大変に大きなものがあると思います。

その間、連盟は「横浜能」という行事を一回も休むことなく今年で五十六回目の公演を開催することになりますし、栄誉ある「横浜文化賞」と「神奈川文化賞」をそれぞれ受賞いたしました。

又、今日日本の能楽界で、もっとも注目を浴びる横浜能楽堂建設にも大きな力を発揮して来たことも間違いのない実績であると考えます。

したがって、それらの積み重ねの道程をふり返りつつ、次の時代へ向っての新しい目標づくりと取り組むべき必要性も強く感ずる所であります。

まさに世阿彌以来の伝統を持つ能を、今後、どのように継承し、発展させるべきであるか、という重くかつ困難な命題とも正面から向きあっていかなければならない宿命を、我々は背負っているという認識を持つべきでありましょう。

趣味として好きでやっている謡曲であり、仕舞でありお囃子であり能でありますが、そのやっているということ自体に我々は、大きな誇りと充実感をもって、より普及活動を拡大してゆく義務があるのではないでしょうか。

既に前号でお知らせした通り、我々の横浜能楽大会（九月十五日）は、高校生以下の子供たちによる能「九頭竜」を中心に番組を編成いたします。

そしてさらに第五十六回横浜能は、掃部山公園において、二夜連続の薪能を能楽堂と共催で実行することになりました。詳細はつめつつありますが、第一日は八月三十日(土)、井伊直弼の作である「筑摩江」を井伊家ゆかりの喜多流で上演いたします。同時に、同じゆかりの茂山家による狂言も登場します。

第二日目　八月三十一日(日)は、茂山家による狂言三番をやって頂くことになると思います。掃部頭の銅像の前で、開港百五十周年を目前にして、この演能は、まさに六十周年にふさわしい番組と言えると思うのであります。

会員の皆様はもとより、横浜市民の多くの方々にこれを鑑賞して頂ければ幸いであると存じます。

大きな期待に胸をふくらませつつ、六十周年の年を盛り上げてゆきたいと思います。

連盟報告

企画事業担当 鈴木力雄

平成十九年四月の定期総会において承認された活動計画に則り、第五十五回横浜能は、金剛流　金剛永謹師による『鞍馬天狗』、和泉流　野村又三郎師による狂言『寝音曲』を上演した。

なお「鞍馬天狗」では能楽堂により、一般公募で選考された五名の子供たちが「花見の子方」として出演した。

「第二十三回五流能楽大会」は十九年九月に、「第十一回五流交流のつどい」は二十年二月に実施した。

なお、更衣・控室は、前回までは流派毎に分けていたが、男性は一階楽屋、女性は二階研修室のそれぞれワンフロアーとした。これにより、流派間の交流・親睦が図られ、好評であった。

平成二十年の「第二十四回横浜五流能楽大会」は、連盟創設六十周年記念の会であり、九月十五日に「NPO子供と生活文化協会(CLCA)」による、子供創作能『九頭龍』を上演します。

この子供能は、大鼓方、大倉正之助師をはじめとする、シテ、ワキ、地、囃子、アイのすべてがそれぞれプロの能楽師の指導を受けている、高校生以下の子供だけの能ですが、子供とは思えない素晴らしい演技を観ることが出来ます。

すでに国内各地のほか、今年三月には中国蘇州市でも演能した。

連盟会員の高齢化のなか大きな刺激となり、勇気付けともなることを期待している。

第十一回 五流交流のつどいを終えて

金剛流 粂亮一

平成二十年二月九日(土)、平年に比べて寒さが厳しく、この日も朝からどんよりした、今にも雪が降りだしそうな天候の中、第十一回五流交流のつどいが開催されました。

今回は、素謡十四番、連吟九番、独吟一番、仕舞十番が発表され、参加者も延べ、三百名を数えました。

九時四十五分、素謡「西王母」から始まり、連吟「芦刈」附祝言「猩々」まで、終演時間十七時三十分に無事終えることが出来ました。これも皆様のご協力のお陰と感謝しております。

五流交流のつどいは、舞台に

出る機会の少ない比較的初心の人達に舞台を多く踏んでいただくという趣旨で行われており、立派なつどいとなりました。これも日頃の成果が発揮されたためと思われます。

　また、発表曲の中で珍しい曲もあり、金春流からは「初雪」が連吟で発表され、この季節にふさわしい曲でした。また、観世流からは創作謡として「都筑」が発表され、興味の深い曲でした。

　今まで楽屋控え室は、流派毎に区切り、第二舞台まで控え室として利用していましたが、提示板の煩雑さや案内の不徹底など事務的な問題が多々ありました。

　今回は、第二舞台は控室として使用せず、また、楽屋・研修室も各流派毎に分けるのではなく、女性は二階の研修室を、男性は一階の楽屋を使用し、第二舞台を申し合せだけの場として利用することによって、担当者への連絡などが今までよりもスムースになったとともに、他の各流派の方との親睦も図れたのではないかと思われます。

　何かと不行き届きな点が多々あったと思いますが、無事つどいを終えることが出来ました。

　これも皆様のご協力のお陰と感謝しております。有難うございました。

「鉢木」ゆかりの地を尋ねて

観世流　星名　道弘

　数年前の晩秋、高崎市上佐野町の常世神社を訪れた。上信電鉄南高崎駅から上越新幹線高架の東側を南へ、一・五キロメートル歩き、東への小道を左折した北側にある。路傍の鳥居を過ぎ家に囲まれた狭い参道を行くと、両側に石灯籠が石台の上にある。数段の石段の上に小さい祠が南向きに、ひっそりと建つ。祠は板葺だったが昭和四十一年の台風で吹き抜かれ、今は瓦葺となった。間口、一間程の切妻造、観音開きの格子戸の質素な有様である。その左前、東向きに「佐野源左衛門旧居跡」と刻んだ高い石碑がある。

　常世の父は下野國佐野庄を領していたが伯父一族に謀殺、領地を横領され、常世は上野国へ追放された。ここは旧居と謂われる。埋木の荒屋を偲んで「鉢木」のクセの一部を奉納した。

　日本画家の小林古径が昭和三十年「鉢木」と題し描いた絵がある。侍烏帽子・浅黄色の狩衣の常世が縁先で梅の木を小刀で正に伐ろうとする姿、厩の痩馬。板敷きの、いろりの先に端座し凝視する時頼、右手の横に粟飯の椀・左奥に甲冑の唐櫃と太刀、錆びた長刀を描いている。

　この絵は講談社野間記念館が所蔵している。石段右下の、これを模した絵は常世が、いろりの前で鉈を振る姿のみとなっている。これと向きあって謡曲史跡保存会の『謡曲「鉢木」と常世碑社』と書いた立札がある。由緒の後に「墓は別に栃木県佐野市葛生町の願成寺境内にある」と誌している。

　常世は藤原秀郷の末孫といわれる。藩翰譜に「秀郷より五代相継いで鎮守府将軍たり・七代足利大夫成行…玄孫、佐野太郎基綱「佐野氏の祖とす」とある。この佐野氏は下野国安蘇郡佐野庄の豪族で、諸国の佐野氏は多くこの系統という。

　尊卑分脈に「基綱の孫ー実綱と曽孫ー盛綱が共に左衛門尉」とある。常世も左衛門尉と名乗っているので、この子孫と思われる。尉＝判官・じょうしは大宝令に「四等官の内、兵衛門府の第三位で、佐スケの下、志サカンの上、国司では守・介の次、掾」とある。秀郷は藤原北家・房前の子、魚名の玄孫で下野国掾の時、平将門を討った功で下野守、武蔵守を歴任した。弓術に秀で近江国、三上山のムカデを退治し褒賞に、三井寺の鐘を頂戴したという伝説がある。

　高崎市赤坂町の「菓子司・老舗『鉢の木』七冨久」に、ゆかりの名菓が二つある。求肥と卵の半生菓子の「鉢の木」と、梅しそ・青柚子・小倉の餡を包んだ押菓子の「三箇の荘」。それぞれの栞に『鉢の木の　むかし語りを思いつつ　この味ひそ深くすぐれる　従三位忠亮』と『梅桜松につもりし鉢の木のむかしゆかしく思ふこの品　従三位忠久』とある。帰路の土産にした。

能「田村」を演じて

観世流
梅若会　安田　有子

「あー、この半年楽しかった」終った後の気持ちでした。

　五月の初めに「お能をしたら」とのお話を受け別世界のことだと思っていましたが、十一月四日は私の誕生日でもあり、せっかくの機会なので挑戦して見たらと主人にも勧められ、お受けする事にしました。

　幾つかの候補の中から、変身できる「田村」にさせて頂きました。いよいよお稽古が始まり、まず流れを靖記先生が舞われ、後はとにかく覚えなさいと…。箒を持ったり、床几に腰掛けたり等の変化もあり、爽快な良い曲だと楽しみになりました。お稽古がはじまると、覚えたはずの謡は出てこない、順番は忘れる、筋肉痛にはなるし、おまけに八月の中野舞台でのお稽古では、サシをした時に見えた手の甲からまでも汗が吹き出て、あの時ばかりは、靖記先生が鬼に見えました。でも先生も汗だくでいらしたので、負けるものかと頑張りましたが、脱水症寸前で目の前が暗くなり座り込んでしまいました。

　やっと流れを覚えられた頃、「今は何を指しているの？」「何処を見ているの？」と指摘され、決められた型の中で表現しなければならない難しさを感じました。

　本番当日。装束を着けて頂きながら、本当に夢みたいと何度思った事でしょう…。

　六郎先生からは優しく「楽しみなさい」と靖記先生からは「今日は主役だから何をしても良いよ」と初めて優しい言葉を頂き今までの緊張が吹っ切れ、一気に楽な気持ちになりました。

お稽古を通じて申し合わせの日まで間違いだらけでしたが、本番で初めて私としては納得がいき、しかも楽しく舞うことが出来たのはとても幸運でした。

堀内先生には、いつも温かい励ましの言葉を始め、何から何まで支えになって頂き、無事に終えることが出来ました。

神奈川七宝会、三〇〇回記念大会を終えて

宝生流　高橋　利雄

それは一月十二日(土)午後一時よりの謡の会でした。所は綱島の横浜市学校教職員互助会、保養所の「浜京」での開催、十九名程出席されました。普段の月例会では、五番本の中から三番位で附祝言で終るのですが、今回は、三〇〇回記念で、而も新たに、昨年後半に宝生流教授嘱託の免状受領のお二人の先生（塚本博理さんと市川俊男さん）のお祝であり、又新年の初会ということから、番組は鶴亀に始まり猩々で終る六番の祝い謡で納めました。

新しい先生方には各々シテ番を勤めて頂く等、常乍ら研鑽の場としてのよりよい一刻となりました。

席を替えて会席膳での懇親会に、これ又一入明るく和やかな中に舌鼓をうち、記念の印の素謡扇を手にささやかながら三〇〇回記念の行事も終えさせていただきました。

先には平成十一年九月に二〇〇回記念の会を相模原の健康保険の宿で催しました折には、当連盟の新堀会長から、「よくここ迄続きましたね」と賞められました。他の多くの同好の会では、もっと永く続けられておる会も多くあると思われますが、当会は昭和五十八年四月に県民センターにて架水会（高橋進先生の同門会）の矢野鶴次郎さん夫妻の主宰になる七人の士によって、第一回の謡会を始められてより二十五年。流友相互の親睦と、流儀の発展向上を目ざし、会員が日頃習得せる技倆、研修、発表の場を持ってきました。従って友誼を重んじ楽しい謡会として続けてきました。

その後、主宰者が三代目の小生になってからも、若い方々もよき研鑽発表の場として、架雪会や他の先生の会の方々も入会なされて、現在では二十三名の会員で、足腰の弱い方々も共に楽しく続けております。

因に、当初より、新堀豊彦さん、渡井蘭子さんには、当会の名誉会員になっていただき、お世話になっておりますことを感謝申し上げます。

岡幸男様のご逝去を悼みて

観世流　小田切　威

岡　幸男様は、昨年十一月下旬より川崎の井田病院で入院加療致しておりましたが、残念ながら平成二十年一月十四日にお亡くなりになりました。

同氏は、生前に皆様のご支援を受けながら謡曲の高揚に努められ、横浜では比較的古く、大きな団体であります海謡会の第三代目の会長を務められました。（海謡会は、昭和三十年四月に第一回例会を宮越賢治氏の中区竹の丸の自宅舞台で開催して以来、春・秋二回例会を行って、本年四月五日には第一〇六回の例会を久良岐能舞台にて開催する予定です）

横浜能楽連盟の一員として、横浜能楽堂建設の資金集めなどに奔走しておられ、現在まで同連盟の顧問などの役職を勤めておられました。

また同氏は、多方面の社会活動に幅広く活躍され、相模鉄道元副社長・衣笠病院（横須賀）元理事長・国際開発救援財団理事・バングラデッシュに小学校をつくる会の会長（現在までに三十六校を建設し引き渡しました）などを歴任されました。

長年、八世観世銕之丞静雪師に師事され、父上様の影響で中学生時代から観世流謡曲に親しみ、仕舞に、素謡に、卓越した指導力を発揮されておりました。

職場においても相模鉄道謡曲部を昭和二十八年に創設されて、多くの社員に謡曲の素晴らしい表現を指導してこられました。

関東私鉄謡曲連合会の創設にも努力され、同氏のご指導の下で例会には、毎年一回開催する相模鉄道謡曲部も参加して参りました。会社の仕事を理由に稽古を休む事の多かった部員も、今になって不真面目であった事を申し訳なく思って、反省するとともに、何事も諦めず一生懸命に頑張る事を教えて頂いたと思い、感謝しております。

同氏の密葬は、去る十七日にご家族のみにて終了致しております。多くのご友人に助けられて、八十三歳の人生を全うされました事のご報告とお礼を申し上ぐべく、奥様の岡　佐喜様をはじめご家族の皆様が主催して、日本基督教団清水ヶ丘教会にて二月十一日（月曜日）午後一時より葬儀（お別れの会）を催され多くの方々のご参列を頂きました。

厚く御礼申し上げます。

皆様に謹んでご報告申し上げまして、同氏のご冥福を祈り、追悼の辞と致します。

習いはじめのころ

喜多流　小林　康夫

「年をとって来たら高尚な趣味を持つように。今、謡の会をやっているから仲間に入らないか」と強くお誘いを受けたのは当浜友会の有力メンバーである松田憲二先輩からである。多少その気になったが、果して続けられるかの懸念があった。

当時アメリカとの合作事業の経営を委され、アメリカのパートナーから毎月のように呼出されるといった生活が続いていたからである。お稽古には毎回出られないかもと心配しながらのスタートになったが、果して欠席が続くことになる。そんな中で比較的まとまった練習の時間と場所を確保出来るところを見つけることが出来た。それは往復の飛行機の中である。片道十時間余、お稽古で録音したテープを繰返し聞くことが出来た、ジェット機のエンジンの音で、多少口から声が洩れても消してくれた。

ある時、隣の席にいたアメリカのビジネスマンが何を聞いているのかと尋ねて来た。一瞬答えに窮したが「これは能と言ってシャパニーズ・クラシカルアンドトラディショナルオペラのようなもの」と何とか説明。

彼はどうやら音楽に造詣が深いようでテープを聞きたいと言う。しばらく聞いてますます興味津々の様子「伴奏は」「指揮者は」「楽譜は」「何人で」等々質問が相次いだ。テープで聞いたのは、素謡と称してコーラスオンリーであること、音楽は日本式フルートとドラムが主体になることなど、ビギナーの限られた知識のなかでの応答が続いた。

能は、外国人には難解な存在であろうと勝手に決めていたが、彼のように興味を示す人がおられることは、嬉しい驚きだった。

習いはじめて、二・三年も経つと社内に知られるところとなり結婚式に出席する機会も多くなる。お祝の挨拶に謡を入れては?と考えた。「高砂」がポピュラーだが、小謡集の「春栄」を選んだ。と言うのはこの曲は両家の姓を入れて謡えるので、より親しみを感じてもらえると考えたからである。

新郎の両親から「立派な謡をありがとうございました」とお世辞半分の挨拶を頂き、汗顔の思いであった。

習いはじめの頃は、何かと冷汗ものが多い。勿論今も…である。折角、先輩にお誘いいただいた謡の道、もっと自信をもって謡えるよう精進に励みたいと思うこの頃である。

小鼓

金剛流　相良　邦子

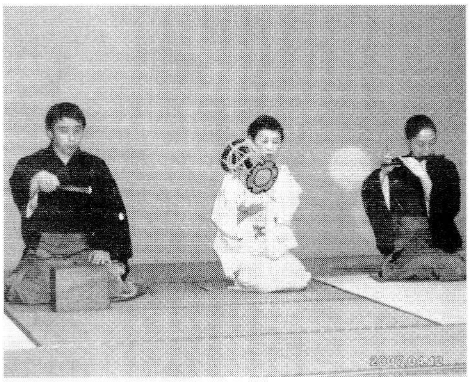
昨年は横須賀市の市制百年での記念行事の催しの中で、横須賀能楽連盟では、ちょうど当番の年でもあり、金剛流で舞囃子「猩々」をいたしました。

私は小鼓(観世流)で参加させていただきました。縁あってその後三度「猩々」を打つ機会があり、その都度「足もとはよろよろ」ならぬ「手元もよろよろ」な部分もございましたが、お舞台に立つまでのプロセスがとても良い訓練になりました。

囃子(はやす)とは良く言ったものだと思います。小鼓はお相手方(太鼓・笛)の流派により、こちらの手も多少変えなければなりません。謡の場合もありますが。いろいろな面で貴重な経験をいたしました。「一年に四回も『猩々』を打てばもう目をつぶっても、又どなたがお相手でも打てるでしょう。」と言われましたがこれがなかなか。でも今後の糧になると思いました。

小鼓の事を少々書かせていただきます。すでに御存知の方もいらっしゃるでしょうが、世阿弥のころ、すでに笛、鼓、太鼓、大鼓が用いられていましたが、小鼓・大鼓の区別があった確証はなく、現存の囃子の型が確認できる資料は江戸時代初頭のものまでしか、さかのぼれないそうです。馬皮(余り老いた馬の皮は不可)を鉄輪に張った表革、裏革、二枚。胴は桜材で漆に蒔絵をほどこしてあり、又は黒のみ(カラスとも言います)の胴もあります。右手で表革を打ち、左手で調べ(素材は麻)を締めたり、ゆるめたりし、革面の張力を加減し、手指のあたる位置を革面の中央や、周辺部位にしたり、打つ強さや、打つ指の本数などを変え、調子紙とよぶ和紙を裏革の表面につばでつけ、振動を整え、演奏中に調子紙をぬらしたり、革面に息をかけたりして、湿度を保ち音色を整えます。小鼓は、囃子の中では女房役(私の師曰く)と言われ、太鼓・大鼓・お笛を聞き打っていきます。

尚、小鼓の流派は、大倉・観世・幸・幸清流の四派あります。



能楽堂だより

二十年五月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

「特別公演」

七月五日(土)午後二時開演

狂言「呂蓮」(和泉流)　野村万之介

能「鷺」(宝生流)　近藤乾之助

S席七千円、A席六千円、B席五千円

チケット発売－電話は五月三日(土)正午から、窓口では五月四日(日)正午から。

特別普及公演「夏休み夢舞台」

八月二日(土)午後二時開演

狂言「附子」(大蔵流)　山本東次郎

能「土蜘蛛」(金剛流)　金剛永謹

こども(高校生以下)対象

S席四千円、A席三千五百円、B席三千円。

チケット発売－電話は六月十四日(土)正午から、窓口では六月十五日(日)正午から。

一般S席八千円、A席七千円、B席六千円。※残券がある場合のみ。

チケット発売－電話は七月十九日(土)正午から、窓口では七月二十日(日)正午から。

源氏物語千年紀　企画公演

「源氏物語－それぞれの恋心」

第一回「夕顔－儚い恋の花」

八月九日(土)午後二時開演

案内人　馬場あき子

朗読『夕顔の巻から』　加賀美幸子

能「半蔀 立花供養」(金春流)　本田光洋

全五回セット券　S席三万円、A席二万五千円、B席二万円。

チケット発売－電話は五月二十四日(土)正午から、窓口では五月二十五日(日)正午から。

単独券　S席六千円、A席五千円、B席四千円。

チケット発売－電話は六月一日(日)正午から、窓口では六月二日(月)正午から。

第五十六回　横浜能　会場　掃部山公園

第一日－薪能－

八月三十日(土)午後六時半開演

狂言「寝音曲」(大蔵流)　茂山千作

能「筑摩江」(喜多流)　出雲康雅

第二日－薪狂言－

八月三十一日(日)午後六時半開演

狂言「鳴子遣子」(大蔵流)　茂山千作

狂言「鬼ヶ宿」(大蔵流)　茂山千之丞

狂言「千鳥」(大蔵流)　茂山七五三

S席六千円、A席四千円。

チケット発売－電話は六月二十八日(土)正午から、窓口では六月二十九日(日)正午から。

お問い合わせ・お申し込みは、☎〇四五(二六三)三〇五五まで。

《編集後記》

▽去る一月、横浜能楽連盟・顧問　岡　幸男さんが逝去されました。おそばに居られた小田切さんに追悼の記をいただきました。

▽今号は、投稿が多く、一部は次号に送らせていただいた。　M・S

横浜能楽連盟　連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合

〒233－0013　横浜市港南区丸山台二丁目二九－一七　新堀方

FAX　〇四五－八四四－二九〇三

◎電話の場合　横浜能楽堂

TEL　〇四五－二六三－三〇五〇